

ハロルド・ピンター『昔の日々』における語りのコントロール不可能性

阿部万里亜

1. イントロダクション

1970年に初演されたハロルド・ピンターの『昔の日々』(Old Times)は、田舎に住むディーリーとケイトという夫婦のもとに、ケイトの昔の友人アナが訪れることで始まる奇妙な三角関係の劇である。記憶を語ることで変化する三人の登場人物の関係性が劇展開の中心となっている。『昔の日々』の批評では記憶語りと登場人物の力関係の連動が指摘されており、登場人物は記憶を語ることを通して現在の人間関係を操作しようとしていると解釈されてきた。例えば、Martin Esslin はディーリーとアナが記憶を語ることで、ケイトとの親密さを競っていると指摘している(192)。しかし、劇を細かく見ていくと、登場人物は必ずしも語りをコントロールできているわけではない。語られた記憶には語り手の優位を崩す要素が内包されている。また、聞き手は語り手による一方的な解釈の押しつけに抵抗する。本発表では劇に潜む語りのコントロール不可能性を明らかにし、このような記憶表象の意味について考察していく。

2. 語りをコントロールする劇としての『昔の日々』

まず、劇において繰り広げられる語りのコントロールについて考察した。登場人物たちは記憶が曖昧で不確かであることを利用し、自らにとって都合の良い記憶を語る。この試みは第一幕でアナが語る台詞に象徴される記憶観に支えられている。アナは“*There are some things one remembers even though they may never have happened.*” (269-70)と述べる。ピンターはインタビューの中でこの台詞について“*The fact is it's terribly difficult to define what happened at any time. [...] So much is imagined and that imagining is as true as real.*” (Gussow 17)と述べている。アナの台詞は記憶と想像の類似性を指摘しているのだ。アナは続けて“*There are things I remember which may never have happened, but as I recall them so they take place.*” (270)と語る。ピンターは同じインタビューにおいて、言葉が現実を再構築する力を指摘し、実際には起こっていない出来事だとしても、登場人物たちが語ることで出来事が再現されると述べている(Gussow 17)。言葉は語られた内容の真偽にかかわらず、現実を再構築し、人々に影響を与える力を持っているのだ。これらの価値観に基づくと、記憶を語ることとフィクションを語ることの区別は曖昧になり、記憶を語るとは、言葉を駆使して都合のよい過去を作ることと同義になるのである。

記憶を語るとは現在の人間関係を変える力も持つ。第一幕ではディーリーとアナはケイトとの思い出を語ることでケイトとの親密さを競い合う。その結果、アナがケイトとの親密さを取り戻し、ディーリーは無視される。記憶の性質を巧みに利用し、語りをコントロールしたアナが、人間関係を支配するのだ。第二幕ではディーリーとアナは同じ出来事についての記憶をめぐる争う。相手が語った内容を踏まえて、語り直すことを通して出来事を書き換えるのだ。結末では今までほぼ沈黙していたケイトが自らの記憶について語り、ディーリーとアナの双方を退ける。まず、ケイトはアナに“*I remember you lying dead.*”(309)と言い、アナの死を回想する。ケイトの語りの中で死者として定義づけられたアナは沈黙する。次にケイトはディーリーからのプロポーズを回想し、結婚して環境を変えようというディーリーの提案をどうしてもよいと思ったことを明かす。ケイトが結婚生活への無関心を表明したことで、夫としての地位を守るためにアナと争っていたディーリーは沈黙する。語りを支配したケイトが場の主導権を握るのだ。このように『昔の日々』は、過去についての語りをコントロールすることで、現在の人間関係のコントロールを目論む登場人物たちの会話に沿って展開している。

3. 語りに内在するコントロール不可能性

次に語りに内在するコントロール不可能性を考察した。第2節で示したように『昔の日々』の登場人物たちは過去の出来事を恣意的に定義することで、他者よりも優位に立つことを目論んでいる。しかし、言葉は語り手にとって都合の悪い事実を暴露することがある。この特徴は主にディーリーの語りに見られる。例えば、ディーリーは付き合い始めた頃のケイトについての語りの中で、ケイトを頼りない存在として位置づけようとする。ディーリーは語りの中でケイトを“*a girl not long out of her swaddling clothes*”(273)と幼い子供扱いする。また、ディーリーはケイトを沈黙だけが美徳、決断力がないと評し(273-74)、最終的には“*A classic female figure*”(274)と形容する。ディーリーは男性である自分が、女性であるケイトの保護者だったという過去を語ることで、ケイトに対して優越的な立場を主張しているのだ。

しかし、ディーリーはケイトの落ち着きのなさを“*the shifting winds*” (273) という比喻を使って形容する際に、

ケイトが自立した人間であることを暴露している。まず、ディーリーはケイトが彼の風向きには従わないと語る(273)。次にディーリーはその風のことはケイトだけが理解しており、彼には理解できないと述べる(273-74)。ケイトはディーリーの理解を越えた存在なのだ。このようにディーリーがケイトに対する優越的な立場を示すために語った台詞は、むしろケイトの自立性を露わにしている。言葉は語り手にとって都合の悪い事実を暴露することがあり、優越的な立場を構築する道具としては不十分なのである。

4. 抵抗する他者の存在

語り手が恣意的に語りをコントロールする試みはそれに抵抗する聞き手の存在によっても揺らぐ。聞き手は語り手が提示した過去に異議を唱える、もしくは相手が語った内容を自らの視点から語り直すことで、語り手による一方的な過去の押しつけに抵抗する。結果的に登場人物たちの記憶は混じり合い、過去の事実や現在の人間関係は登場人物たち全員の相互影響関係の中で作られる。劇の結末の黙劇はこのような過去や現在のあり方を端的に示している。三人の登場人物は劇の結末の黙劇において、今まで語られた出来事を再現する。彼らは過去を通して、現在の彼らの状況を理解し、関係性を再構築しようとしているのだ。しかし、彼らは部屋から追い出された過去を再現することには抵抗し、部屋に留まり続ける。

まず、アナがケイトの語りに抵抗し、部屋に留まる。ケイトは語りの中でアナの存在を否定する。ケイトはディーリーに以前は誰と一緒に住んでいたのかと質問された際、“No one at all.”(311)と答えたことを思い出す。ディーリーの前に一緒に暮らしていたアナの存在は否定されたのだ。ケイトに存在を否定されたアナはドアの方へ向かい、部屋から出て行こうとするが、途中で出て行くのをやめて、寝椅子に横たわる。アナはケイトの語りに従い、部屋から自らの存在を消すことを拒んでいる。次にディーリーがアナの語りに抵抗し、部屋に留まる。アナが部屋に留まった後、三人はアナが第一幕で語ったある男にまつわる記憶を再現する。アナによると、その男はある晩、ケイトとアナが暮らす部屋にやって来て、二人の関心を得ようとして失敗し、翌朝には部屋から出て行った。アナは男が部屋から立ち去ったことを“It was as if he had never been.”(271)と語り、男の存在感を薄めている。しかし、結末における再現で男の役を演じたディーリーは部屋を立ち去らず、肘掛椅子に腰掛ける。ディーリーは男を部屋から排斥したアナの語りに抵抗し、部屋に留まるのだ。

このように劇の結末部において、登場人物たちはお互いの語りの影響を受けつつ、一方的に語りに支配されることに抵抗している。その結果、劇は三人が孤立した状態で終わる。

5. 結論：語りのコントロール不可能性が持つ意味

以上のように、本発表ではピンターが『昔の日々』において語りのコントロールの可能性と不可能性の両方を描き込んでいることを明らかにした。『昔の日々』における語りのコントロール可能性と不可能性の描写は言語を用いて現実を操作することの可能性と限界を示している。ピンターは作家としてのキャリアにおいて一貫して言語と現実の関係性に着目し、言語が現実の隠蔽を試みることを指摘してきた。例えば、1962年のスピーチにおいて、台詞とは赤裸な状態を隠し、他者から身を守るための“a constant stratagem” (“Writing” 24)だと述べている。また、1990年のスピーチでは「人間が言葉を使うという行為は、現実を曖昧化し、歪曲する—実際に存在するものを歪曲し、実際に起こることを歪曲する—ことにならざるをえないのでしょうか。」(「スーパーマン」75)と問いかけ、真実をごまかす言語に対する批判を強めている。このような言語観はピンターの後年の政治批判やメディア批判の基盤にもなっている。『昔の日々』は語りのコントロール可能性と不可能性を描くことで、作家ピンターが、言葉が過去や現在の出来事を再現、歪曲、修正する力とその危険性や限界を自覚しつつ、創作に向き合っていたことを明らかにしているのである。

引用文献

Esslin, Martin. *Pinter The Playwright*. Methuen, 1982.

Gussow, Mel. *Conversation with Pinter*. Nick Hern Books, 1994.

Pinter, Harold. *Old Times*. Plays 3, Faber & Faber, 1991, pp.243-313.

Pinter, Harold. “Writing for the Theatre.” *Various Voices Prose, Poetry, Politics 1948-1998*, Faber & Faber, 1998, pp. 19-25.

ハロルド・ピンター「おお、スーパーマン」『何も起こりはしなかった一劇の言葉、政治の言葉』喜志哲雄編訳、集英社、2007、pp.56-76.